

令和 5 年 5 月 3 日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00155

研究課題名（和文）シューベルトと古代 異教性、悲劇、プラトン受容に即して

研究課題名（英文）Schubert and Antiquity: Gnosis, Tragedy and Platon-reception

研究代表者

堀 朋平（HORI, Tomohei）

国立音楽大学・音楽学部・非常勤講師

研究者番号：10723398

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：18世紀末にヨーロッパの知識人界隈で急速に広まった古代の遺産が、シューベルトの創作に与えた大きな影響を、3つの領域にわたって解き明かした。第一に、プラトン思想、なかんづくその『パイドロス』『饗宴』に語られるエロスの思想が「愛Liebe」となってシューベルトの音楽と文章に現れたこと。第二に、リベラルな宗教観のもと広がっていたグノーシス性が、友人マイアホーファーを介してシューベルトの音楽づくりに生涯にわたる影響をもたらしたこと、第三に、キリスト教の「救済」にそぐわない「悲劇」思想がシューベルトを動かしていたこと、である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、もっとも直接的な次元では、雑誌『美学』（2022）、東京大学文学部の英文紀要（2020）、そして単著（2023）という、普及力のある3つの紙媒体で発表された。のみならずその成果を、数々の講演で、よりかみ砕いた形でさまざまな層にアピールできた。おもな発表の場は、一般社団法人全日本ピアノ指導者協会、カルチャーセンター、現役の演奏家・作曲家・批評家とともに行っているオンライン勉強会、の3つである。以上によって、学術的な波及力のみならず、演奏家・市井の愛好家に対する研究成果の還元が、有機的に行われた。

研究成果の概要（英文）：My study clarified three influences of the Antique, which was widespread in the 18th-century Europa, on Schubert: (1) Aesthetics of Plato, especially his Phaedrus and Symposium, presented in Schubert's music and his essays, as Liebe (translation of eros). (2) The Gnosis, which was widespread under the religious liberalism of Vienna, deeply influenced Schubert's oeuvre, especially through his close friend, Johann Mayrhofer. (3) The idea of tragedy, which is incompatible to Christian salvation in Vienna, was one of the most important aspects in Schubert's musical philosophy.

研究分野：美学および芸術学関連

キーワード：プラトン パイドロス グノーシス 信仰告白 典礼文の削除・編集 悲劇と救済 キリスト教

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) マクロな背景

作曲家フランツ・シューベルト(1797-1828)が生きた時代は、ヨーゼフ2世の急速な啓蒙主義の成果ゆえ、市井の人々が大量の文章を残すようになった。それらが研究の俎上に乗るようになった1990年代以降、シューベルトの音楽と人生にも抜本的な再考が迫られてきた。市井の、つまり歴史上それほど重要でないと考えられた友人たちの文書が、柔軟な知的素地を持つ作曲家に大きな影響を与えていたことが、縷々認識されるようになってきたからである。

### (2) テーマ選択の理由

こうした背景のもと、シューベルト研究に新たな文脈を与える喫緊のワードとなるべきものが「古代」である。申請者は2016年の単著で、親友たちの哲学的素養を核とし、作曲家が触れえたあらゆる知(リヒテンベルクから啓蒙主義時代の思想から、シラー、シュレーゲル兄弟といった同時代のラディカルな思想)に光を当てることでシューベルトの音楽を再考した。この際、友人たちがプラトンやアリストテレスやキケロを読んでいたことも明らかにはなったが、テーマとして「古代」を見据えるにはいたらなかった。ロマン派はむしろ「中世」と親近性が高いという通念が、その主な理由である。

## 2. 研究の目的

上記を踏まえ、フランツ・シューベルトの創作と人生に、古代の知がいかなる影響を及ぼしたかを明らかにすることが本研究の目的である。本研究は3つの柱からなる。

### (1) 異教性

キリスト教が権威を比較的失い、宗教的なリベラリズムが支配的であった19世紀初頭にあって、キリスト教側が「異端」とみなしてきたグノーシス性が、『ヘルメス文書』の独訳(1781年)を契機として知識人に広がっていた。この文書はフリードリヒ・シラーの諸作をはじめ、多くの知識人を陰に陽に魅了した。この志向がシューベルトに与えた影響範囲を吟味するとともに、シューベルトの宗教音楽創作にみられる異教的傾向を探る。

### (2) 悲劇

18世紀のドイツ語圏では、哲学界と演劇界を火元として、古代悲劇の思想が知識人を席卷していた。フリードリヒ・シラーの崇高論は、その影響を色濃く示す一例である。ウィーンにもその波紋は大きく広がった。ウィーンはカトリックの伝統が強い都市であったため、悲劇が称揚する「没落」がキリスト教的な「救済」が摩擦を生んでいた。その中心にいたのが、シューベルトの知人であった劇作家・美学者ハインリヒおよびマテウスのコリン兄弟と劇作家フランツ・グリルパルツァーである。この背景を念頭に、古代悲劇の思想がシューベルトに与えた影響の深度と広がりを吟味する。

### (3) プラトン

シューベルトに影響を与えた思想家、なかんずくヴォルフガング・ゲーテとフリードリヒ・シェリングは、古代ギリシアの哲学者プラトンの影響を強く受けていた。ウィーンでは、シューベルト歌曲の詩を提供したフリードリヒ・レオポルト・シュトルベルクの訳・註解によるプラトン選集が広く読まれていた。同書はシューベルトの親友ヨハン・マイアホーファーの愛読書であった。この背景を念頭に、プラトンの美学　なかんずく『パイドロス』と『饗宴』に語られた eros の思想　がシューベルトのロマン主義に与えた影響をたどる。

### 3. 研究の方法

3つの作業を平行させつつ互いにフィードバックしあいながら本研究を執行した。

( ) **原典の読解** 上述の一次史料 『ヘルメス文書』や、18～19世紀の諸哲学者による悲劇論・古代論 に何が書かれているのかを読解する。

( ) **原典の受容** おもに当時の雑誌や友人による書き物から、上述(α)がシューベルト周辺にどのように受容されていたのかを明らかにする。

( ) **音楽の分析** シューベルトが歌詞をどう処理したか、音符にいかなる思想を込めたかを抽出し、そこに上述(β)がどれほど反映されているかを検討する。

### 4. 研究成果

上記項目「2. 研究の目的」で挙げた3つのテーマに即して記述する。

#### (1) 異教性

本テーマでの研究成果は4点である。(a)『ヘルメス文書』が友人マイアホーファーに受容されていたことが、当時のドキュメントから明らかになった。(b)同文書の多くの対話編に語られる思想 厭世観・炎と大地の関係・他なる天界への憧憬 が、マイアホーファーの多くの詩を貫いていることが明らかになった。(c)マイアホーファーの詩に基づく全シューベルト歌曲を分析し、作曲の所産が詩人の思想をきわめて忠実に写しとったものであることを明らかにした。この傾向は、たとえばゲーテ歌曲に見られる 詩と音楽の齟齬 と比べて際立ったものである。(d)6作におよぶシューベルトのミサ曲の歌詞を徹底分析し、「クレド」(ミサ典礼文における信仰告白の章)の歌詞に加えられた編集過程が、作曲者の神学観を反映したものであること、その神学観がグノーシス的とよびうるものであることを明らかにした。

上記の成果(おもにa, b, d)を詳述したものを雑誌『美学』に投稿し、掲載された。

#### (2) 悲劇

本テーマでの研究成果は3点である。(e)カントが切断した叡智界と現象界を古代悲劇に立ち返って架橋するシラーの試みが、コリン兄弟の創作物と論文によってウィーンに波及していたことは指摘されていたが、これがグリルパルツァーの悲劇と論文にも色濃く反映していたことを明らかにした。(f)シューベルトが、グリルパルツァーの処女作となる悲劇に基づく歌曲(D653)において、死から救済へのラディカルな移行を核心としたことを析出し、さらに同詩人の詩に基づく晩年の作品(D920)においては、古代悲劇のコロスと類似した手法をとったこと、またこの結婚祝いの詩そのものに悲劇の思想の反映が読み取れることを指摘した。(g)19歳のシューベルトの日記に記された一節がアリストテレス『詩学』の引用であることを、上記の文脈に照らして指摘し、あわせてシューベルトの思考がストア派と酷似するものであることを指摘した。

上記の成果(e, f)を詳述したものを東京大学文学部の英文紀要に投稿し、掲載された。

#### (3) プラトン

本テーマでの研究成果は3点である。(h)シューベルトの親友マイアホーファーがシュトルベルク訳のプラトン選集を読んでいたことは指摘されていた。この情報を基に、別の友人フランツ・ブルッフマンがプラトンに救いを求めたことを、ブルッフマンの日記から明らかにした。(i)プラトン思想および新プラトン主義の切り口から、モーリッツ・シュヴィントによるシューベルト絵画の意味を論じた。(j)「愛と痛み」というシューベルト自身が語るキーワードが、『パイドロス』およびそれを愛読したマイアホーファーの詩に由来することを明らかにし、この二極がシューベルトの創作を深く貫いていたことを論じた。

上記の成果(h, j)を単著にまとめた。なお同書は、本項目の3テーマ全てを、大きな文脈のなかで総合的に深めつつ論じ直したものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 HORI, Tomohei	4. 巻 45
2. 論文標題 Faust, Tragedy and Schubert	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JTLA : Journal of the Faculty of Letters, the University of Tokyo, Aesthetics	6. 最初と最後の頁 75-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002000936	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 堀 朋平
2. 発表標題 編集された「クレド」の神学 グノーシスとシューベルト
3. 学会等名 美学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 土田英三郎ゼミ有志論集編集委員会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京藝術大学出版会	5. 総ページ数 640
3. 書名 音楽を通して世界を考える 東京藝術大学音楽学部楽理科土田英三郎ゼミ有志論集	

1. 著者名 美学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 美学の事典	

1. 著者名 日本18世紀学会『啓蒙思想の事典』編集委員会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 714
3. 書名 啓蒙思想の百科事典	

1. 著者名 堀 朋平	4. 発行年 2023年
2. 出版社 アルテスパブリッシング	5. 総ページ数 648
3. 書名 わが友、シューベルト	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------